

# 伊藤一彦歌集『言靈の風』（角川書店）

## 駒田昌子 暴力の世に風

・牧歌的で言靈ふくんだ風のやうと日向弁  
聞きき石牟礼道子は　『言靈の風』  
タイトル歌。あとがきに、石牟礼道子が  
「ことばといふものは、言靈、（中略）南の  
風のように、ほとほと渡つてくる日向弁  
をきくと、心がうるおつて、いい夢を見る  
んじやないかと」と記した文章が引かれ  
ている。

二〇一八年から二〇二二年までの作品  
が収められている、作者の第十六歌集。  
二〇二〇年以来の新型ウイルスの感染拡大  
による生活の変化の影響が、もちろん滲む。  
・身のほどを知らぬ人類に仕置だと新型ウ  
イルスの手紙の來たり  
・飛行機も地下鉄も乗らず佳人にも接せず  
月見草に会ふなり  
・黙食の懇親といふ不思議なる会にわれら  
は箸うごかせり

・暴力を使はず人を死なしむるウイルスさ  
なきだに暴力の世に  
ウイルスを憎み恐れるような視点はな  
い。「黙食の懇親」の滑稽さは詠いあげず、  
見えないウイルスの存在を、ただ考える。  
・空には鳥の脂にじめりにんげんの街より  
とおく離れきたれば　『瞑鳥記』  
「にんげん」であるはずなのに、「にんげ  
ん」として居づらそうな作者像は、第一歌  
集から通奏低音のよう鳴りつづいている。  
・寒まさる山の毛物ら大いなる朝陽のぼる  
を人より待たむ  
・よたよたと超あはれ蚊が霜月の書齋に入  
りく本読みをれば  
・春分の日よりも早く田に入り水はかがや  
く燕を待ちて  
一方、「にんげん」ではなく、言葉を持  
たずしに存在している命を思う作者の心は、  
伸びやかだ。「山の毛物」の表記選択は、  
民話や童話の一ページのよう。  
・しかすがに冥しどおもふ牧水を生み白秋  
を生みし九州　『火の橋』  
・明るくて樂天的でのんびりの県民性のは

・ふるさとに長く暮らしてふるさとの空を  
知れるか空は間はねど  
・一行の文も書き得ぬ鬱の身を連れ出し月  
の光を呑ます  
学生時代以外を宮崎に生きてきた作者で  
あればこそ。ただ肯定するのではなく、多  
面的な故郷と自分自身を見つめてきた。  
・我が不器用いとほしむなり父も母も不器  
用のまま生終へたれば  
・なめくぢに塩ぶりかけるわが妻を見たく  
なけれど見てゐたるなり  
・家族もしつかりと見つめる。見つめるか  
らこそ滲んでくるユーモアが、温かい。  
・人の世を映さぬ天上おもひつつ元旦の酒  
しづかに捧ぐ  
・勝負なく生死もなく白雲はかがやき流る  
有か無かの世を  
・巻頭歌、そして巻尾歌。有るか無いか。  
それだけの命なのかもしない。だからこ  
そ、複雑なようで単純で、そして愛おしい。  
コロナ禍による外出制限の影響、そして年  
齢にも因るのだろうけれども、作者の足元  
を深く掘り返すような一冊だと感じている。

(二八六〇円・税込)